

カンボジア新規事業に向けて

会員の皆様、私たちがカンボジアに事務所を開設してから、もうすぐ5年目になります。現地では、「オンカーホープ」(NGO ホープ)と呼ばれて親しまれています。

コンポントム州で行っている診療所機能強化事業では、診療所での妊婦健診や家族計画といった母子保健サービスの質が向上し、多くの成果を上げ、2007年末われわれの目標が達成されたことを確認しましたので、これまでの地域の支援を終了としました。

この1月より開始の新規事業地はより遠い農村部で距離は倍になりましたが、これまでの経験を生かし、まず第一歩として、事業計画を、保健行政関係者、診療所の保健スタッフや村の代表と一緒に年度ごとの計画を作成しました。計画では目標指標も設定し、例えば、地域の母子保健の鍵を握る診療所助産師の母子保健の知識とスキルについては、PHJがカンボジア保健省に準拠したチェックリストで、事業終了の2010年までに85%まで向上させ、維持できる事業計画としました。

新しい地域で始める事業で重要視したいのは、地域の人の自主性です。経済、農業、交通、インフラなど様々な問題がありますが、私たちは「健康であること」は人の生活に欠かせない基盤とし

て、地域保健に取り組んでいます。特に、母子への保健サービスは母子が地域で健康な生活を営む上でなくてはならないものです。PHJは保健の問題を、診療所だけではなく、地域の皆さんと一緒に解決していきたいと思えます。

地域の皆さんの参加によって、地域の実情にあって、後々まで成果が残る活動を行っていききたいと思います。(中田 好美)



PHJ事業計画に参加の伝統的産婆とボランティアの人たち(全員女性です)

巻頭言 / PHJ10周年に思う



ピープルズ・ホープ・ジャパン
理事・代表

須見 彰

PHJは昨年、設立10周年を迎えました。この記念年に幸いにも2つの大きな支援事業を実施できました。「タイAIDS予防教育センターの設立」と「イラク小児心臓病患者の手術救命」です。

タイはPHJ支援先としてもっとも古く、中でも「AIDS予防教育」はPeer Education手法により大きな効果をあげ、タイのみならず周辺諸国からも「教えてほしい」「勉強したい」との声が多くありました。AIDS予防教育を周辺諸国に展開するには「教育センター機能」が必要です。そこで「10周年記念事業」として設立したいと多くの企業から特別募金をえて実現しました。(ホープニュースNo.41参照)タイでのAIDS予防教育は成功例であり、これを周

辺国に横展開することは非常に効率的な支援と思っています。このセンターを活用しベトナムへの支援をすでに開始しています。

一方「イラク小児の手術救済」はProject HOPEとの連携支援のひとつで、生まれつき重度の心臓奇形(大動脈と肺動脈が逆につながっている完全大血管転位症)小児2人を日本で手術に成功し命を救いました。

この実現には「国立循環器病センターの手術協力」「産経新聞あけみちゃん基金の資金援助」「マクドナルドハウスのイラク患者付き添い家族への宿舎協力」など数々のご協力のおかげです。(同No.42参照)

10周年の記念年にこのようなふたつの大事業を実施できたことは誠に光栄なことです。結局は10年間の活動経験の積み重ねでノウハウの集大成とも言えます。それもひとえに私たち団体を支えてくださった会員の皆さまのおかげと心から感謝しています。今後の10年の新しい幕開けにしたいと思います。

タイ活動報告

● HIV/AIDS 感染予防教育

10月10-11日、チェンマイにて12名のマスタートレーナーにより39名のピア（仲間）教育者へのトレーニングワークショップを実施しました。教える側、学ぶ側の積極的参加により成功裏に終了。

12月1日のワールドエイズデーおよびバレンタインデーには、HIV/AIDS 感染予防への意識向上をもくろみ、特別企画を実施。コンドームの配布、Tシャツペイント競争、および展示を行いました。



キャンペーン風景

● 子宮頸がん予防教育

子宮頸がんの問題点、その予防の必要性の認識調査を、対象地区（マエリム、マエタン）の三つの村対象に

行った。本プログラムの内容説明を、15名のヘルスワーカーと15名の村のリーダーに対し実施しました。

2月には、二つの地区（マエリム、マエタン）のヘルスステーションの人たち、および、二つの病院（ナコンピ病院、マイタン病院）の看護師さん、あわせて40名へのトレーニングワークショップを実施しました。

● HOPE パートナープログラム

プログラムは順調に推移しており、卒業患者（ワサン）および新たな支援者（里親）を得て、プログラムに新しい3名の患者を迎えることができました。

また、患者自身あるいはその両親が、健康あるいは自立教育の一部を担当するインストラクターにもなってくれています。



（蓮見 雅彦）

卒業できたワサンと
そのお母さんのプ

インドネシアから ちょっぴりうれしいニュース

もうすぐ活動開始4年目になるバンタン州セラン県の地域保健医療システム強化事業から、ちょっぴりうれしいニュースです。

この事業対象の5自治区・5診療所の中の1つにティルタヤサ診療所があります。事業開始当初は、診療所スタッフが出勤してこない、スタッフ内のコミュニケーションがない、医師と助産師が対立しているなどすべての面でひどい状況でした。PHJが関係しているミーティングでもスタッフ同士の喧嘩が始まったり、報告書やデータが提出されないなど日常茶飯事でした。「どうしたらよいのか…」と頭を抱え状況に耐えかねて、活動を一時停止させたこともありました。この3年間、辛抱強く説いて実践した結果ようやく診療所スタッフが「地域医療に対し

自分たちの任務の重要さ」に気づき始めました。「村の助産師」でありながら村に住んでいない助産師が多かったのですが、今では自ら進んで村に住まいを移し、村長も率先して村人との関係を強化し始めました。「保健局指定24時間診療所」でありながらも医療従事者が常駐していない診療所が多い中、ティルタヤサ診療所は自ら「指定24時間診療所」となることを宣言し、準備中です。

ティルタヤサ診療所所長は、「PHJの活動を通して、自分たちが担う地域医療への重責に気づいた。これからも地域から信頼される診療所になれるように努力する。」と話しています。私の知らないところで、彼らは確実に成長している…と実感し、非常にうれしく思うと共に今後の彼らの活躍に期待しています。（伊藤 美夏）



村長（奥）も出席する助産師・ヘルスボランティア啓蒙教育



プサー村での助産師による栄養食調理教室

カンボジア出張報告

1月末よりカンボジア出張をおこないましたので、プレイベン州の助産トレーニング事業と首都プノンペンでの超音波医療機器診断技術トレーニング事業の報告をいたします。

●プレイベン州の助産トレーニング

私が訪問したのは、PHJと病院産婦人科の協働で実施している今年度3回目の助産トレーニングの最中でした。

このトレーニングでは、地域の母子保健の担い手である診療所助産師が、地元の中核病院で助産技術を習得することを目的としています。PHJは、地域の中核病院産婦人科で働く助産経験豊富な医師や助産師に指導者養成トレーニングを行い、講師として養成してきました。その彼女らが講師となり、一回につき2名の診療所助産師に以下の科目で講義と病院実習を4週間集中トレーニングを実施しています。

プレイベン州保健局で母子保健分野の責任者であるボラ氏から、助産トレーニングを支援する団体は複数ある



新生児の手当てをしている研修生

- 1)講義：衛生管理・分娩経過図表作成・正常分娩・産後健診、等々
- 2)実習：正常分娩の実習、リスクのある分娩の見極め、どのタイミングで病院への移送を判断する必要があるのか等を学ぶ。

●講義前後で受講生の助産知識のテスト結果

	講義前	講義後
助産知識理解スコア	56点	92点

●実習前後での助産技能テスト

	実習前	実習後
助産技能習得度	60点	99点

が、最近の調査で、PHJの助産トレーニングを受講した診療所助産師の評価が一番高かったとの嬉しいコメントをいただきました。

また、講師役を務める病院助産師が、教えることに興味を持って知識や技術で不明瞭なところを自ら復習し、教え方の工夫をすることで、講師として自身の知識や技術が上達したと語る彼女らの自信にあふれる表情が印象的でした。

●「超音波医療機器診断技術トレーニング」事業視察

このトレーニングは、首都プノンペンで毎月100件前後の出産を扱い、多くの市民に利用されている市立病院で今年度から始まった事業です。このトレーニングでは、①妊産婦の異常を超音波医療機器で診断できる基本的な技術の習得、②産婦人科医師が症例検討会で相互に継続的に学びあうシステム作りを目指し、市立病院産婦人科医師を対象に、日本産科婦人科学会産婦人科専門医である西野共子医師が、PHJが寄贈した超音波医療機器を使って指導しています。西野先生には、3回現地に行っていただき、丁寧な指導をいただいております。

1月末この市民病院を訪問し、産婦人科のソピー医師から話を伺いました。ソピー医師からは、「医学部では超音波医療機器診断技術を学ぶ機会がなかったので、PHJのトレーニングはすごく役立つ。学んでいる診断技術により、以前では手遅れとなるケース、特に前置胎盤などの危険な病態をタイミングよく診断し対処できるようになった」とのコメントを貰いました。

指導している西野先生によれば、市立病院産婦人科医師は、基礎的な知識はついてきたが、症例数が限られる



西野先生の技術指導

ため技術的な課題があるとのことでした。このため、基礎的な技術の習熟度を確認するために試験を実施し、習熟度に応じた指導を行い、基礎技術の確実な習得を目指します。また、市立病院産婦人科医が経験した症例を全員で検討するという学びあいのシステム作りの準備も進めています。

(石関 正浩)

会員のひろば



ルーマニア洗濯機基金と
ホープ・ジャパン
畠山 陸雄（個人会員）

ヨーロッパの東端に位置し、その起源を古代ローマ帝国に由来すると誰もが自負しプライドは高いが、21世紀の初めの失業率は10%を越え国民の平均月収といえば1万円未満だった貧しい国がある。1989年までチャウシェスクの支配に苦しんでいたルーマニアである。

この国の、当時は国内第2の工業都市だったブラショヴと武蔵野市が友好関係を結んだのは、1995年のことである。その後、両市交流の窓口としてブラショヴに設置された武蔵野文化センターを軌道に乗せるべく、私が2000年初頭に派遣された。武蔵野市の嘱託職員の立場で交流協力員としてである。

その頃ピープルズ・ホープ・ジャパン(当時はプロジェクト・ホープ・ジャパン)がブラショヴ市の市立産婦人科病院(ベッド数300余)に医療援助を行っていたが、その一環として業務用洗濯機と乾燥機を寄贈することとなった。その洗濯機なるものは第二次世界大戦の折、ブラショヴを占領していたドイツナチ兵の軍服を洗ったという代物で、今やすっかり老朽化して洗濯してもかえって汚れてしまうと陰口を叩かれていた

程である。この病院はブラショヴ市民が必ずお世話になるという唯一の施設であるため、新しい洗濯機・乾燥機の導入は即、ブラショヴ市民の生命の安全を保証するものと言っても過言ではなかった。

市民の生命に直結するような支援を続けてきたホープ・ジャパンの趣旨に共鳴した武蔵野市民の有志がブラショヴの赤ちゃんに洗濯機を贈る会を立ち上げ、街頭に出て募金活動を始めて多額の資金を集めることが出来た。私は現地の武蔵野文化センターの協力員であったが、現地の病院と寄贈者両者の意向をつなぐ役割を果たしていた。このことは当初の派遣目的にはなかったが、こういう事業こそ両市の交流そのものと市の意向は意に介さず、休暇を利用して洗濯機を製造する会社に実物を確認の為、イタリアまで出かけたものである。

寄贈を受けたブラショヴ産婦人科病院で働く職員はもとより、現地市民からも大きな歓迎を受け、私が2年後現地の陸軍病院で外科手術を受けた時、執刀した院長の夫人が産婦人科病院の医師で、彼女から私の事を聞いて入院中ヴィップ待遇を受けた、という後日談もあった。

武蔵野市民でありながら、ホープ・ジャパンについてはブラショヴに赴任するまでその存在さえ知らず、他国との交流にも色々な形があるものだ、と思い知った次第で私としても貴重な経験となっている。

07年、年末募金のご報告と御礼

昨年の年末募金(特製カレンダーと、職場募金袋によるお願い)は合計4,081,942円になりました。3年連続4百万円を越えるご支援です。誠に有り難うございます。

用途は予定通り、カンボジアの無医村で新たに展開する、助産師、産婆教育です。この国の妊産婦死亡率は日本の45倍、乳児死亡率は32倍です。地方に行け

ば更に深刻です。私どもPHJでは現地5年の妊産婦健康支援実績を踏まえ、今年支援地域を更に農村部の4地区に進めます(本号巻頭の中田所長報告をご参照ください)。カンボジアでの年間活動予算はこれで約1000万円となりますが、その重要な部分を年末募金から頂くこととなります。

皆様心から御礼申し上げます。(大河内)

今日からあなたも地球人 個人会員・ホープパートナー会員募集中!

FAX 0422-52-7035

ピープルズ・ホープ・ジャパン 行

個人会員申込書 会費3,000円/年・口× 口 = 円/年

ホープパートナー会員申込書 会費3,000円/月

の中にチェック☑を入れて下さい。

ふりがな

氏名

電話

自宅住所 〒

勤務先

電話

お申込みは、郵送、FAX、ホームページなど、どのような方法でも、結構です。後程送金方法を連絡させていただきます。

発行：ピープルズ・ホープ・ジャパン / 発行責任者：須見 彰 / 編集人：三木 巖 / 発行日：2008年4月1日

〒180-8750 東京都武蔵野市中町2-9-32 TEL：0422-52-5507 FAX：0422-52-7035

E-mail：info@ph-japan.org インターネットホームページ：http://www.ph-japan.org